

二〇二四年度

適性検査型 第二回 入学試験問題

適性検査Ⅰ（五十分）（全四ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 解答用紙は二枚です。試験開始の指示と同時に、二枚の解答用紙に受験番号と氏名をそれぞれに書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはつきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

問題は次のページからです。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

(＊印のついている言葉には本文のあとに「注」があります。)

かつて国民作家だった夏目漱石が日本の英文学研究の創始者の一人だったことは、意外に知られていない。夏目漱石は作家になる以前には一人の英文学者だったのである。(中略)

その英文学者時代の講義をまとめた『文学論』で、漱石は興味深いことを言っている。科学は＊因果関係のはじめから終わりまですべてを隙間なく語れなければならないが、文学はそうではないというのだ。では、文学言語は何に答えるのか。文学言語は「Why」(なぜ?)という疑問に答えなければならない、と漱石は考えたようだ。何か起きたとき、「なぜ?」と問うたでしょう。つまり、「原因は何か?」と問うたでしょう。そのとき、答えは一つに決められるのだろうか。

＊黒崎 宏が面白いことを言っている。地震で家が倒壊した。ところが、その原因は一つには決められないと言うのだ。家が倒壊した原因は「地震のため」と答えることもできるし、「家の造りが弱かったから」と答えることもできるし、あるいは「地球に重力があったから」と答えることもできるはずなのだ。すなわち「原因」として何を挙げるかは、客観的に決まっている訳ではない、という事を物語っている。「原因」として何を挙げるかは、基本的には、それに係わる人間の問題意識に依存するのである。

漱石は、何を「原因」として挙げるかは「好み」の問題だと考えた。それを

真つ当な「原因」だと判断するかどうかは、まさに読者の側の問題なのだ。漱石は「＊所謂文芸上の真は時と共に推移するものなるを忘るべからず」とも言っている。この「真」はいまなら「リアリティー」(ほんとうらしき)と言い換えることができるから、「リアリティー」を支える読者の「好み」は時代によって違うものだと言っていることになる。小説ならば、そこに挙げられた「原因」がリアリティーを持つか否かは、その時代の読者の「好み」に委ねられるのである。

文学は科学のように隙間なく「事実」を説明する学問ではなく、むしろ隙間を読者の「好み」によって埋める娯楽なのである。それが、文学に対する読者の仕事である。文学は読者が自らの仕事を果たすことによって文学たり得ると言える。だから、文学は多義的であってかまわないし、＊断片的であってかまわないのだ。いや、そうあるべきなのだ。それを縫い合わせ、一つの「物語」に織り上げるのが読者の仕事なのだから。これが漱石の考える文学の自由である。そして、これが①漱石がイメージする文学である。(中略)

夏目漱石は「ある人の一日を知るには、一日分の活字を読まなければならない」という意味のことを言っているが、もちろんこれは＊言葉の綾であって、実際には一日中活字を読んでもある人の一日を十分に理解できるわけではない。逆に、場合によっては「今日一日なにもなかった」という味も素っ気もない一文だけで、十分にその人の一日を伝えることもできるだろう。ここでは、②言葉の隙間こそが重要な働きをしていると言える。小説の言葉とは不思議なものなのだ。

たとえば、断片的で隙間だらけなのにあたかも出来事が連続しているように見せかけることは、つまり部分を全体にみせかけることは、小説という芸術にとってまずはじめにやらなければならない事柄である。小説は長い時間をかけてそういう技術を鍛えてきた。試みに、次の文章を読んでみてほしい。

朝九時に起きると、僕は歯を磨いてから朝食をとって、急いで玄関を出た。

どこかの小説にでもありそうな何の変哲もない文章だが、こんな文章でもいくつかの問題を孕んでいる。

この文章は、朝起きてから出かけるまでの出来事が、順を追ってごく普通に書いてあるように読める。しかし考えてもほしいのだが、これだけのことがもし仮に連続して起きていたとしたら、この人物は玄関に蒲団を敷いて歯ブラシをくわえたまま寝ていて、かつそのまま玄関であらかじめ準備の出来ていた食事をとったことになる。その上、背広姿で寝ていたとでも言うのだろうか。

そんなバカなことは普通やらないというぼくたちの常識が、この文章を自然には見せないのである。読者は、この文章に書かれなかった多くの動作―蒲団から出るとか洗面所に行くとか朝食を作るとか着替えるとか、そういう動作を自分の経験に照らして補って読む。つまり、③知らず知らずの間に、言葉の隙間を埋めているのである。ぼくたち読者は、意識せずに実に多くの仕事をしているのだ。その結果、断片的で隙間だらけの文章が連続しているかのように感じられるのである。

(石原千秋「未来形の読書術」による。
なお、本文には省略等があります。)

〔注〕

因果関係	二つ以上のもの間に原因と結果の関係があること。
黒崎宏	日本の哲学者、成城大学教授。
所謂	俗に言う。よく言う。
多義的	一つの言葉が多くの意味を持っているさま。また、話の内容などが多くの意味に解釈できるさま。
断片的	切れ切れで、まとまりのないさま。
言葉の綾	巧みな言葉の言い回し。
孕んでいる	その中に含み持っている。

【問題1】

下線部①「漱石がイメージする文学」とありますが、「漱石」は文学をどのようなのだと考えていますか。次の文の空欄に合うように、「リアリティー」という言葉を使って、五十五字以上六十五字以内で説明しなさい。

漱石は、【 五十五字以上六十五字以内 】と考えている。

【手順】

1 日々の生活の中で、「言葉の隙間を埋める」ような経験を簡潔にまとめる。

2 1の経験を、筆者の考えと比較しながらまとめる。

3 【手順】の1と【手順】の2を関係付けながら、将来、どのような場面で、どのように活かしていけるのかを簡潔にまとめる。

【きまり】

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○ 〃や。や「なども、それぞれ字数に数えます。〃や。が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます。(ますめの下に書いてもかまいません。)

○ 。と「が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

【問題2】

下線部②「言葉の隙間こそが重要な働きをしていると言える。小説の言葉とは不思議なものなのだ。」とありますが、「小説の言葉」の不思議さとは、どのようなことですか。九十字以上百字以内で説明しなさい。

【問題3】

下線部③「知らず知らずの間に、言葉の隙間を埋めているのである。」とありますが、あなたが日々家族や友達との間で、この方法を生かすことができるとしたら、どのような場面でどのように生かしたいですか。あなたの考えを、三百字以上四百字以内で書きなさい。ただし、あとの【手順】と【きまり】に従うこと。